



Title	対訳データに基づく中日受身表現の比較対照研究
Author(s)	李, 偉
Citation	日本語・日本文化研究. 2018, 28, p. 24-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71146
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

対訳データに基づく中日受身表現の比較対照研究

李偉

1. はじめに

本稿は、中国語を母語とする日本語学習者への受身文指導法をさらに深く議論していくための資料を提供することを目的とする。

日本語の受身文は中国語を母語とする日本語学習者には難しく、混乱しやすい文法項目の一つであるとされている。日本語の受身表現を既に学んだ中国人中上級学習者でも、習得できないことがある。『寺村誤用例集データベース』から二つの例を紹介する。直しは筆者によるものである。

例 1 *もし、この映画はもう一度、放映したら再びもう一回見ようと思っています。

[→もし、この映画がもう一度放映されたら、再び見ようと思っています。]

例 2 *というのは、私が国にはそのついて、まだ発展されないし、大学でもそんな科目の時間が少なかったんです。

[→というのは、私が国は、まだ発展していないし、大学でもそんな科目の時間が少なかったんです。]

日本語の受身文が中国語を母語とする日本語学習者にとって難しい理由として、動詞の受身形の作り方といった文法的面だけではなく、構文レベルと意味レベルの仕手と受け手を判断した上で、視点のことを考慮に入れて文脈からの情報を読み取る必要があるということが考えられる。

しかし、場面依存性の高い日本語の受身文を習得する際に、その存在意義や機能は、単文のレベルを超えた角度から何をどのように説明すればいいか、現場ではどのように応用すればいいか、現実的には問題がある。説明する必要があることは既に広く認識されているが、中・上級レベルの学習者向けにどのように説明できるのか、関連の議論は十分とは言えない。

日本語の受身文の特徴を正しく理解するために、学習者の立場に立って、視点の捉え方に関する理論を中国の日本語教育現場に応用しやすいようにする工夫が必要だと考えた。本稿は、比較を通して、中日受身表現に見られる特徴を分析し、中国語話者のための受身文指導法に関する研究を深めるための基礎研究とすることを目指す。

2. 先行研究

受身文に関して、いろいろな先行研究が蓄積されてきたが、ここではすべてに触れることはできない。本稿と関係のあるものとして受身文に関する先行研究の概観（田中 2010、李 2015 等）、受身文の習得順序に関する研究（王 2006、2009；黄 2013 等）、視点と事態の

把握の仕方をめぐる検討（池上 1981 ; 2011、金水 1992、彭 2008、趙 2016、古賀 2018 等）、中国の日本語教科書における受身文の説明に関する研究（葉 2003、李 2017 等）、日本語・中国語間の翻訳と受身文の機能に関する議論（藤田 2007、加藤 2016、李 2016 ; 2017 等）も挙げられるが、ここでは、関連のある先行研究を簡潔にまとめてみる。

日本語の受身文について、川村（2012）は「受身文」を「ラレル」形述語文のタイプとして捉え、意味的特徴から研究史を整理した。川村氏の立場 A、立場 B の議論と「被影響」の意味解釈などは、示唆を受けている研究成果であるが、〈被影響〉の意味の把握は、ゼロ初級から日本語を学ぶ学習者にとって、理解しにくいところがあるかもしれない。しかも、日本語学研究の文の許容度と日常生活の許容度は別の次元の話ではないかと考えられる。受身の「被影響」という意味の内実を理解するために、前田（2011）で指摘している分類法の活用を考えた。

前田（2011）は、受身の認定について、「動詞の語幹に（r）areru を接続させた形態であり、能動形に戻せるものを受動表現と認定した。可能・尊敬・自発（思い出される・思い出される）は除き、また、受身形のみが慣用的に用いられると考えられる「（先が）思いやられる」、名詞化した「憎まれ（役）」「お呼ばれ」「とらわれ（身）」等も排除した。」

（前田 2011 : 69）と述べている。前田（2011）は、上述した記述に基づいて、文脈依存性の高い受身を単文末、複文末、連体修飾節、連用修飾節、引用節、疑問節の 6 種類に分けた。前田（2011）の分類法では、慣用表現に現れている受身を除いている。しかし、それらの慣用表現から、受身の「被影響」の意味内実と文法的発想を反映できる可能性がある。上述の考慮から、受身形を含める慣用表現を別立てで扱う必要があるかもしれないが、本稿では、認定範囲に入れる立場をとっている。視点に着目して、中国語を母語とする日本語学習者の文脈依存性の高い受身文習得を進めていくために、前田（2011）の受身分類に従う。文脈のある環境で習得研究を展開していくためである。

中国語のほうは、基本的に大河内（1982）の分類に従う。受身の意味を表す介詞「被」「叫」「让」等のマークを用いた文は「被」で代表させて「被」構文（“被字句”）と呼ぶこととする。標識のない受動文（“自然被動文”）もあるが、別立てで扱うこととする。

視点については、日本語学分野（森 1998 ; 2002、田窪 1997 等）、日英比較分野（久野 1978、水谷 1985、辻 2004 ; 2013 等）の研究が挙げられる。中国語の視点を研究対象の一部とする研究成果はあるが（姚 2012、渡邊 1996 ; 2000）、中国人学習者を対象とした研究はまだ十分とはいえない。視点に着目して、文脈のある環境で受身文の習得状況を見ていくために、彭（2008）の定義を支持する。

3. 研究方法及びデータに関する説明

調査データに関しては、ほかの方法もあるが、本稿は文脈のある環境での中日受身文の視点の差を見るための中国語原文日本語訳本方向の資料として『神なるオオカミ』（上）を選

択することにした。日本語訳本は上下二冊に分かれている。下冊はエピローグ、知的探索、翻訳後記などがほとんどであり、本文と内容的につながっているが、ジャンルの角度から見て、本文と大きく異なっているので、今回の考察資料に入れないことにした。『ノルウェイの森』(文庫版)は上下二冊の本文を調査対象にした。また、受身を抽出する際に、同じ動詞が使われていることもあるが、本稿では語彙的受身表現¹⁾は統計に入れていない。

最後に、日本語中国語双方向の小説から抽出した対訳データを、タイプ1(中日両方受身表現を使用するタイプ「日本語○中国語○」)と、タイプ2(日本語だけ受身表現を使用するタイプ「日本語○中国語×」)と、タイプ3(中国語だけ受身表現を使用するタイプ「日本語×中国語○」)とに分けて、受身文の使用実態と表現上の特徴、とりわけ受身使用と視点との関わりをめぐって分析していく。

対象となった小説の対訳データに出た受身が1回使用されたところは1データとして認めることとする。データ整理の便宜上、日本語のほうのデータ番号を奇数に、中国語のほうのデータ番号を偶数にした。即ち、例えば「データ[1]」は日本語の受身形のデータ箇所であり、それに対応する中国語は[2]となる。

難易度の高い文法項目の一つとされる受身文の指導法に関して考察するため、データの収集方法として他にもあるが、今回は、中国人作家姜戎著『狼図騰』(約21万字)とその日本語訳『神なるオオカミ』(約37万字)、村上春樹著『ノルウェイの森』(約30万字)とその中国語訳『挪威の森林』(約23万字)を調査し、考察を加えていく。両言語データ字数の対応性を考えて、『神なるオオカミ』(上)を調査の対象とした。原書も訳書も本文の字数のみカウントした。

資料となった対訳小説の表現に関して、本稿は、原本と訳本の書かれたままの表現を適切な表現を出版された原文のままデータとして扱うこととする。同じ文章でも翻訳者によって、異なる表現で表す可能性もあるが、本稿では、翻訳の仕方については議論せず、翻訳者の訳語をデータとして採用することとする。

対訳データとしての選択理由は以下のとおりである。

(1) 30か国以上の言語に翻訳されている有名な小説である。ほかのジャンルの資料も多いかもしれないが、小説というジャンルの資料を選択した理由は、対訳小説が広く市販されていて、学習者にとっても入手可能な資料ではないかと考えたからである。

(2) 中国においても日本においても受容度が高いと思われる。『神なるオオカミ』は、中国建国後、最大の版權輸出成功例とされている。上海訳文出版社が刊行した「村上春樹全集」の翻訳を担当した林少華(中国海洋大学教授)は、「欧米でも翻訳されているが、中国での人気は世界一だ」と断言する。(読売新聞 2004年の記事より。出典 URL <http://archive.fo/5QTgK> 最終アクセス日 2018年10月30日)

(3) 対訳データを日本語教育現場に応用する可能性を考えて選択した。場面依存性の高い日本語の受身文を習得する際に、その存在意義や機能は、単文のレベルを超えた角度から何を

どのように説明すればいいか、現場ではどのように応用すればいいか、現実的には問題がある。説明する必要があることは既に広く認識されているが、中・上級レベルの学習者向けにどのように説明できるのか、対訳データの使い方を検討しながら、現場への提言を試みる事が可能だと考えたからである。

村上春樹著「ノルウェイの森」であるが、1987年に、講談社から書き下ろし作品として刊行された。2004年に文庫改訂版が出されたが、文庫版にはあとがきが掲載されていない。本稿では、2004年刊行の文庫改訂版を調査対象とした。頼明珠版、葉恵版の中国語訳本も挙げられるが、いずれも繁体字版である。簡体字版としては、林少華訳しか見受けられない。姜戎著『狼図騰』の日本語の訳本は2018年11月現在、2007年に講談社によって刊行された『神なるオオカミ』しか見られない。

日本語中国語双方向の対訳小説を分析データとして用いる理由は三つある。一つは訳文と原文との比較対照を行い、日本語の受身文使用と視点との関わりから中国人学習者の習得の困難点を解決することを試みたいからである。もう一つは、学習者が親しみをもちやすいベストセラーから例文を抽出し、補充材料として受身文の説明に使用する可能性を探りたいからである。三つ目は、中国の日本語教育現場に応用する立場から、前田(2011)の考察結果を、日本語・中国語双方向の対訳データで検証するためでもある。その結果は、よりよい受身文指導法に関する議論を深めるための基礎材料として提供できるのではないかと考えている。

4. 収集したデータの全体像及び分析結果

この節では、対象となった資料の調査結果を報告する。表1に示すように、総数は1411対である。今回収集した日本語中国語双方向の対訳データから見ると、データ数の多い順に、タイプ2、タイプ1、タイプ3となっている。視点の角度から、日本語の受身文の習得困難なところを解決しようとするために、タイプ1とタイプ2を主な分析対象として扱うこととする。

表1：今回の調査で収集した日本語中国語双方向対訳データの全体像

タイプの名称	中国語原文日本語訳文方向 (対)	日本語原文中国語訳文方向 (対)	計 (対)
タイプ1 (「日本語○中国語○」)	376	181	557
タイプ2 (「日本語○中国語×」)	533	190	733
タイプ3 (「日本語×中国語○」)	116	15	121
計	1025	386	1411

まずは、出現位置の角度から対訳のデータを整理した。中国語原文日本語訳文のほうの使用傾向は、以下の表2に整理した。出現位置によって、受身の対訳データを6種類にまとめ

て、それぞれの割合と比率を示した。

表2：出現位置から見た中国語原文日本語訳文の方向の受身使用傾向

番号	出現位置	データ数	比率 (%)
1	単文末	73	8.03
2	複文末	212	23.32
3	連体修飾節	224	24.65
4	連用修飾節	366	40.26
5	引用節	26	2.86
6	疑問節	8	0.88
計		909	100.00

受身の出現を含む文の種類から言えば、単文、複文の出現となる。連体修飾節と連用修飾節については、前田（2011）の観点に従い、連体修飾節には形式名詞を修飾する補足節を含めてカウントした。今回の調査で抽出されたデータは909対である。中国語原文日本語訳文の場合、受身の出現位置の多い順に、連用修飾節、連体修飾節、複文末、単文末、引用節、疑問節となっている。複文レベルの出現位置はデータ全体の9割強を占めた。単文レベルのデータ（単文末に出現した受身）は1割弱を占めた。この調査結果から、多くの先行研究で指摘している日本語の受身文の場目に依存性あるいは文脈依存性を裏付けているのではないかと考えらえる。李（2016、2017）の調査では、引用節、疑問節に出現した受身のデータが見受けられなかった。数は少ないが、今回は引用節、疑問節に現れた受身のデータもあった。

次は、日本語原文中国語訳文方向の受身の使用傾向を整理した。出現位置によって、6種類にまとめて、表3で示した。

表3：出現位置から見た日本語原文中国語訳文方向のデータの使用傾向

番号	出現位置	データ数	比率 (%)
1	単文末	44	11.86
2	複文末	67	18.06
3	連体修飾節	99	26.68
4	連用修飾節	135	36.39
5	引用節	24	6.47
6	疑問節	2	0.54
計		371	100

日本語原文中国語訳文のデータの場合、受身の出現位置の多い順に、連用修飾節、連体修飾節、複文末、単文末、引用節、疑問節となっていて、中国語原文日本語訳文の対訳データの使用傾向とほぼ一致している。複文レベルの出現位置はデータ全体の9割近くを占めた。

単文レベルのデータ（単文末に出現した受身）は1割強を占めた。引用節、疑問節に出現した受身のデータの割合は、中国語原文日本語訳文のほうよりもやや下回っている。それは小説の内容と関わりがあるかもしれない。

視点に着目して、中国語を母語とする日本語学習者の受身文の習得研究に参考になりそうな資料を提供するために、受身の使用傾向と視点との関わりを考察していく。中日両言語の視点の相違を示すために、中国語原文の日本語直訳をも提示する。翻訳者によって、言葉遣いや表現の習慣など異なっている可能性もあるので、中国語母語話者による直訳の案を提供することとする。日本語直訳の部分、下線は筆者によるものである。

5. 中国語原文日本語訳文データから見た受身使用と視点との関わりに関して

この節では、各タイプにおけるデータの使用傾向を整理して、報告する。受身の出現位置と中国語原文の表現上の特徴に言及しながら、両言語の視点に関しても議論していく。

5.1 タイプ1【日本語○ 中国語○】における使用傾向

中国語原文日本語訳文方向のタイプ1の受身の使用傾向とそれと対応する中国語の原文との関係に関して、以下の表4で示した。

表4：タイプ1【日本語○ 中国語○】における使用傾向

番号	タイプ	データ数	比率（%）	
1	「被」マーク	264	70.21	
2	「被」の付け加え可能 ⁱⁱ	18	4.79	
3	「被」以外のマーク	「在……下」	11	2.93
		「為……所」	3	0.80
		「被……所」	4	1.06
		「讓」	39	10.37
4	語彙的表現	25	6.65	
5	その他	12	3.19	
計		376	100.00	

タイプ1（[日本語○ 中国語○]）における受身の使用傾向は以下のように整理する。中国語で受身の使用傾向の多い順に、「被」マーク、「被」以外のマーク、語彙的表現、「被」の付け加え可能な表現、その他となっている。そのうち、「被」マークを用いたデータは全体の7割強を占めた。「被」以外のマークのなか「讓」を用いた受身データは1割強を占めた。「讓」は中国語では使役にも受身にも使用できる介詞とされているが、受身用法の認知優先順位は使役より低い、という指摘があった。調査資料とした小説は、日常生活の場面と会話のやりとりも入っているので、受身マークとしての「讓」は、話し言葉で多用する傾向にあるのも、そのためかもしれない。また、「為……所」、「被……所」は「被」以外のマ

クとして挙げられるが、松岡・古川・費ほか(2008)で指摘しているように、書き言葉に使われることの多い表現である。

例3【被マーク】

JYⁱⁱⁱ ガスマも力が尽きてきたらしくオオカミに数歩前に [77] 引きずられている。

CG 他发现嘎斯迈快拽不动恶狼了，她又 [78] 被狼朝前拖了几步。

日本語直訳：彼は、ガスマも力が尽きてきたことに気付いた。彼女はまたオオカミに数歩前に引きずられている。

「被」は中国語受身表現の代表的なマークと思われる。例3の場合、原書も日本語訳も受身表現を使っている。複文末に現れている受身である。日本語訳文のほうは一貫性が高く、「ガスマ」の視点に立って述べている。それに対して、中国語の原文のほうは「かれ（“他”）→彼女（“她”）」のように移動している。この「彼女」は「ガスマ」のことを指している。中国語原文の視点は比較的に移動性が高いと言えそうである。

例4【被の付け加え可能】

JY かれらがもっているのは二本の馬棒だけである。万一、オオカミの群れに人の気配を [3] 気付かれたら、二人の「天葬」が [5] くりあげられるのはまちがいない。

CG 他们只有两根马棒，万一狼群 [4] 嗅出他们的人气，那他俩可能就要 [6] 提前天葬了。
(日本語直訳：かれらがもっているのは二本の馬棒だけである。万一、オオカミの群れが人の気配に気付いてしまったら、二人の「天葬」はこの場で早めに行うに違いない。)

例4の中国語原文において、二つの動詞（「嗅出」と「提前」）の前に、仕手（「狼群」）の後ろに被の付け加えは可能だと考えられる。日本語訳文の視点は「かれら」「二人の天葬」に立って述べている。それに対して、中国語の原文のほうは「かれら（他们）→オオカミの群れ（狼群）→かれら（他俩）」のように移動している。

例5【「被」以外のマーク】

JY ガスマの後ろにいる二匹の犬は羊の群れに [69] さえぎられ、やきもきするだけで手の出しようがなく、オオカミの氣勢を抑えようとして、吠えたてている。

CG 嘎斯迈身后的两条大狗也 [70] 被羊群所隔，干着急无法下口，只得一个劲狂吼猛叫，压制大狼的气焰。

(日本語直訳：ガスマの後ろにいる二匹の犬は羊の群れにさえぎられていて。焦っていても対策がなく、オオカミの氣勢を抑えようとして、吠えたてているだけである。)

例5のような、被マークの変形である「被……所……」を使う例もある。古代中国語の残留で、被マークの変形あるいは延長と思われる。基本的に書き言葉に現れるとされる。連用修飾節に出現した受身であるが、視点は「二匹の犬」に立っている。受身文の使用によって統一されている。中国語原文も「二匹の犬」に立っていて、この文から見ると、比較的に固定のようである。

例6【在……下】

JY さらにもう一度力いっぱいぶつけようと、オオカミの群れは王に [49] 率いられて、全員、向きを変え、耳を後ろに傾け、首を縮めて、黄塵を巻き上げた風のように、一気に山奥へ逃げていった。

CG 他再猛击几下，狼群 [50] 在狼王的率领下，全体大回转，倒背耳朵，缩起脖子像一阵黄风一样，呼地向山里奔逃而去。

(日本語直訳：彼はさらにもう一度力いっぱいぶつけようと、オオカミの群れは王の引率の下で、全員、向きを変え、耳を後ろに傾け、首を縮めて、黄塵を巻き上げた風のように、一気に山奥へ逃げていった。)

屈 (2008) によれば、「在……下」も中国語受身マークの一つであるが、典型的な受身マークではないとされている。例 6 のように「……の引率の影響下で、」と理解することが可能である。連用修飾節に出現した受身であるが、受身文の使用によって視点が「オオカミの群れ」に統一されている。この文において、中国語原文のほうは、移動的な視点をとっていると考えられる (彼→オオカミの群れ)。

例 7 【語彙的受身】

JY 陳陣は突然、天にそっと頭を [31] なでられて、天へ昇っていくには早すぎる魂に、自信と力を [33] そそぎこまれたのかもしれない。

CG 也可能是陈阵忽然 [32] 领受到了 腾格里(天)的精神抚爱，为他过早走失上天的灵魂，[34] 揉进了 信心与定力。

(日本語直訳：陳陣は突然、天にそっと頭をなでられているような感じがする。それは、天へ昇っていくには早すぎる魂に、自信と力をそそぎこまれたのかもしれない。)

例 7 の [32] のなかの「領受」は、中国語で受身の意を持っている語彙と思われる。「なでる」の受身形と対応する中国語の表現は「领受到了腾格里(天)的精神抚爱」である。複文末に出現した受身である。例 7 の場合、中国語原文も日本語訳文も視点の移動 (「陳陣→(天)」) が見受けられる。

例 8 【その他】

JY 陳陣は手のひらでぽんと膝をたたくと、「さがしていたオオカミの赤ん坊は、この巢穴のなかだ。あのメスオオカミに [841] だまされたんだ。」といった。

CG 陈阵用巴掌猛一拍自己的膝盖说：我要找的小狼崽就在这个洞里。咱们两个大活人 [842] 让那条母狼给涮了。

(日本語直訳：陳陣は手のひらでぽんと膝をたたいて「さがしていたオオカミの赤ん坊は、この巢穴のなかにいるよ。あのメスオオカミにバカにされたんだ。」といった。)

例 8 の「让……给涮了」は日本語の「だまされた」と対応するが、中国語では、「让……给……」は話し言葉でよく用いられる表現とされている。単文末に出現した受身であるが、「陳陣」という人物の話の一部となっている。「陳陣」という人物の視点は、中日両言語において同じように見受けられる。つまり、「オオカミの赤ん坊→(私たち)」のように移動し

ているのではないかと考えられる。

5.2 タイプ [2] 「日本語○中国語×」の場合

表5：タイプ2（「日本語○ 中国語×」）における使用傾向

番号	タイプ		データ数	比率（％）
1	客観叙述		374	70.17
2	解釈		63	11.83
3	その他	「譲」	11	2.06
		「把……」	36	6.75
		「是……」	3	0.56
		「怕……」	6	1.12
4	対応項目なし		40	7.51
計			533	100.00

タイプ2（「日本語○ 中国語×」）における受身使用傾向を以下のように整理する。使用率の多い順に、客観叙述、解釈、対応項目なし、その他となっている。そのうち、客観叙述が一番多く、全体の7割以上を占めた。メイナード（2004）で指摘している文脈のある環境での受身機能の一つである結果描写機能と関わりがあると考えられる。収集しているタイプ1とタイプ2のデータ数から、日本語の受身は中国語の受身より使用範囲が広い、ということを確認した。また、対応項目なしのデータが7.51%を占めた、という調査結果に関して、日本語原文、中国語訳文のデータに同じような傾向が見受けられるかどうか、実証する必要があるのではないかと考えられる。違うジャンルのものを資料にして調査すると、新しい結果が出る可能性もある。

筆者は、先行研究の森田（1998）を活用して受けの姿勢、受身的な日本語の発想を中国人学習者に説明する必要があると考えている。また、中日対照の研究成果を活用する角度からも日本語教育現場に応用しやすい定義を採択する可能性を検討すべきだと思う。

例9【客観】

JY 草原にやってきて二年たつが、草原の大きなオオカミとその群れが、陳陣はやはり怖くてたまらない。この人里から遠く離れた山奥で、オオカミの群れを目の前にして、彼の口から [1] 吐き出される 白い息も震えている。

CG 虽然陈阵来到草原已经两年，可他还是惧怕蒙古草原上的巨狼和狼群。在这远离营盘的深山，面对这么大的一群狼，他嘴里 [2] 呼出的 霜气都颤抖起来。

（日本語直訳：陳陣は草原にやってきて二年たつが、彼はやはり草原の大きなオオカミとその群れを怖いと感じている。この人里から遠く離れた山奥で、オオカミの群れを目の前にして、彼の口から吐き出される白い息も震えている。）

例 9 は連体修飾節に出現した客観タイプの受身であるが、中国語において形容詞性質な「……的」に相当する。それは中国語の被害が基本意の受身から離れているので、受身の枠に入れられないと思われる。例 9 の場合、中日両言語は同じように「陳陣／彼」の視点で述べていると考えられる。

例 10 【解釈】

JY 二年前、陳陣が北京からこの国境地域の牧場に [9] 下放されたときは、十一月の下旬だったが、オロン草原はすでに雪で一面真っ白になっていた。

CG 两年前陈阵从北京到达这个边境牧场 [10] 插队的时候，正是十一月下旬，额仑草原早已是一片白雪皑皑。

(日本語直訳：二年前、陳陣が北京からこの国境地域の牧場に下放されたときは、十一月の下旬だった。そのときのオロン草原はすでに雪で一面真っ白になっていた。)

例 10 の「插隊」は特定の時期の用語であり、「当時の学生が生産隊に編入される。農村に住みつく。」という意味である。日本語に直訳すれば「割り込み」という表現と対応してしまう。誤解を招く表現となるので、意識で「下放する」という表現を用いて解釈していると考えられる。連体修飾節に出現した受身であるが、この文において両言語の視点は同じように「陳陣」に立って述べている。

例 11 【その他】

JY 中国の兵書には、十倍以上の兵力をもって包圍殲滅戦をすることと [161] 書かれているが、モンゴルの騎兵はオオカミといっしょで、一をもって十に当たる。

CG 中国兵书上 [162] 讲，有十倍以上的兵力才敢打围呢。蒙古骑兵真跟狼群一样厉害，能以一当百。

(日本語直訳：中国の兵書は次のように述べている。十倍以上の兵力をもって包圍殲滅戦をすることができる。モンゴルの騎兵はオオカミと同じようにすごくて、一をもって十に当たる。)

例 11 は連用修飾節に出現した受身である。森田 (1998) で指摘したことを引用して説明すると、この場合の受身使用は、個人の認識を超えてより客観的に事態を把握する効果があると理解して妥当であろう。例 11 の場合、日本語の訳文は「モンゴルの騎兵」の視点に立って述べているが、それに対しては中国語の原文のほうは 2 つの動作主をそれぞれ主語の位置に立てている。つまり、中国語のほうは動作主を中心に客観的な事実を述べていて、「…讲」という表現において受身の意がないと思われる。それは、中国人日本語学習者が翻訳するとき受身を使用しない傾向を生む原因の一つといえるだろう。

5.3 タイプ 3 (「日本語×中国語○」) の場合

中国語原文日本語訳文のタイプ 3 における使用傾向を表 6 で示す。

表 6：タイプ 3 (【日本語× 中国語○】) における使用傾向

番号		タイプ	データ数	比率 (%)
1	「なる」型表現	自動詞	42	36.21
2		なる	14	12.07
3	能動表現		46	39.65
4	その他	その他	9	7.76
5		「で」	5	4.31
計			116	100.00

タイプ3 ([日本語× 中国語○]) における使用傾向を以下のように整理する。使用率の多い順に、なる型表現、能動表現、その他となっている。そのうち、なる型表現は一番多く、半数近くを占めた。なると「ことになる」のような「なる」を含める文型はそもそも自動詞あるいは自動詞の性質を持っているとみなされている。自動詞、自動詞の役割に準ずる表現は、日本語の受身文と同じく「なる」型表現に属すると言えよう。そして、このデータ整理の結果から、日本語がなる型言語に近い言語であるという池上一連の研究(池上 1981, 2006, 2011) の裏付けになっているのではないかと考えられる。日本語は「なる」型言語に近い言語であるとされているが、新しい要素の加入もあるようである。グローバル化の影響による言語接触などの関係で、「する」型言語の性質も少しずつ増えていく傾向にある、という可能性もないとはいえない。日本語の能動表現で中国語の受身文と対応しているデータは全体の4割近く占めた。中国語原文日本語訳文の材料である『神なるオオカミ』は中国の少数民族の一つであるモンゴル族のトーテムの内容が絡んでいるので、その事実とトーテムに関する話の魅力をできるだけ読者に伝えようとする目的で中国語のものの構成を保持しているのかもしれない。

例12【なる】

JY 帰る間際になって、老人は牧場革命委員会の委員として、突然、会議に〈3〉に残ることになったが、その資料をすぐに生産大隊に届けるようにと本部から指示された。

CG 回家时，老人作为牧场革委会委员，突然〈4〉被留下开会，可是场部指示那些文件必须立即送往大队，不得延误。

(日本語直訳：帰る間際になって、老人は牧場革命委員会の委員として残された。その資料をすぐに生産大隊に届けるようにと本部からの指示があった。)

例12において、中国語のほうは典型的な受身マークである「被」を使っているが、それに対して、日本語のほうは「ことになった」という「なる」的言語表現を使っている。

例13【で】

JY だんだん寒くなってきた。道のりの半分ほど行くと、太陽も寒さ〈7〉でがたがた震えて地平線の下に縮こまってしまった。

CG 天越来越冷，大约走了一半路程，太阳〈8〉被冻得瑟瑟颤抖，缩到地平线下面去了。

(日本語訳：だんだん寒くなってきた。道のりの半分ほど行くと、太陽も寒さでがたがたになって、地平線の下に縮こまってしまった。)

例 13 の場合、中国語の原書もその日本語訳も擬人法を使っている。「寒さでがたがた震えて」は「縮こまってしまった」という「なる」的言語表現を修飾しているが、それに対して、中国語のほうは基本的に「被+動詞(「冻」)+結果表現」という構成で太陽の様子を受身マークの「被」で述べていると考えられる。

例 14【自動詞】

JY これは魂が出ていくときに頭蓋骨に〈9〉ぶつかった音にちがいない。

CG 这一定是他的魂魄〈10〉被击出天灵盖的抨击声。

(日本語直訳：これは魂が出ていくときに頭蓋骨にたたきだされた音にちがいない。)

例 14 の日本語訳のほうは自動詞「ぶつかる」を使っている。連体修飾節に出現したこの「なる」的言語表現は中国語の”被”構文と対応するが、中国語の原書の場合、全体として事実を述べている。

例 15【その他】

JY 草原のモンゴル人は〈29〉たとえ凍り死んだってオオカミの毛皮を使わない。

CG 草原蒙古人〈30〉就是被冻死也不睡狼皮。

(日本語直訳：草原のモンゴル人はたとえ凍死させられても、オオカミの毛皮を使わない。)

例 15 において、日本語の表現(「たとえ……だって……」)も中国語の表現(「就是……也……」)も譲歩の意を表す表現が使われている。日本語のほうは「なる」的言語表現(「凍る」)も含まれていて、中国語のほうは草原のモンゴル人の性格として、「凍死」という影響を受けても生活習慣を変えない、という事実を述べている。

日本語のほうは受身が使われていないが、自動詞をはじめとする「なる」的表現をつかうのがほとんどである。教育現場での検証も必要であるが、中国語を「する型言語」に近い言語と、日本語は「なる型言語」に近い言語と理解することが中国人日本語学習者への受身指導法をもっと深く議論するために取り入れることは有効ではないかと思う。自他動詞と受身の選択問題も絡んでいるが、なる型言語の本質と受身表現との関わりを日本文化の角度から学習者に説明すると良いのではないかと考えている。中国語は動作主、動作結果を重視する傾向があるがそれに対して日本語は話者への影響、状態を重視する傾向があるといえるだろう。

6. 日本語原文中国語訳本データから見た受身使用と視点との関わりに関して

この節ではまず各タイプの受身使用傾向を報告し、そして受身の使用と視点とのかかわりに関して分析していく。

6.1 タイプ1【日本語○ 中国語○】における使用傾向

タイプ1における使用傾向を整理すると、表7となる。

表7：タイプ1【日本語○ 中国語○】における使用傾向

番号	タイプ	データ数		比例（％）
1	「被」マーク	101		53.72
2	「被」の付け加え可能	34		18.08
3	「被」以外のマーク	叫	2	23
		給	10	
		在……下 / 中 / 里	11	
4	語彙的表現	14		7.45
5	その他	9		4.79
計		181		100.00

日本語原文中国語訳文のタイプ1（[日本語○ 中国語○]）における使用傾向に関して、以下のように整理する。使用率の多い順に、「被」マーク、「被」の付け加え可能、「被」以外のマーク、語彙的表現、その他となっている。「被」マークを使っている例が101あり、全体の半数以上を占めた。「被」以外のマークのうち、「讓」「叫」「給」を用いたデータは全体の1割ぐらい占めたが、「在……下 / 中 / 里」（日本語訳：～の影響下で）という非典型的なマークも5%近く見受けられた。

例16【「被」マーク】

JG 朝方ばらばらと降ったりやんだりしていた雨も昼前には完全にあがり、低くたれこめていたうっとうしい雨雲は南からの風に[41] 追い払われるように姿を消していた。鮮やかな緑色をした桜の葉が風に揺れ、太陽の光をきらきらと反射させていた。

CY 早上“噼里啪啦”时停时的雨，上午就已完全止息了。低垂的阴沉沉的雨云，也似乎[42] 被南来风一扫而光似的无影无踪，鲜绿鲜绿的樱树叶随风摇曳，在阳光下闪烁闪烁。

（日本語直訳：朝方ばらばらと降ったりやんだりしていた雨も昼前には完全にあがり、低くたれこめていたうっとうしい雨雲は南からの風に追い払われるように姿を消していた。鮮やかな緑色をした桜の葉が風に揺れ、太陽の光をきらきらと反射させていた。）

「被」は述語「被」マークの後ろに補足成分が来るものが圧倒的多い。例16の場合、「被」の後ろにある「一扫而光」は動作の結果描写ではないかと考えられる。この文も主語は述語動詞「追い払う」の受け手であり、「被」マークの直接後に来るのはその動作の仕手である。連用修飾節に出現した受身であるが、日本語原文も中国語の訳文も視点は「雨→雨雲→葉」のように移動している。

例17【「被」を付け加える可能】

JG 家そのものは旧かったが、台所はつい最近[193] 改築されたらしく、流し台も蛇口も収納棚もぴかぴかに新しかった。

CY 房子本身虽旧，但厨房却像最近[194] 改装过，烹调台、水龙头、餐具橱全都光闪闪地焕

然一新。

(日本語直訳：家そのものは旧かったが、台所はつい最近改築されたい。流し台も蛇口も収納棚もびかびかに新しかった。)

例 17 の場合、中国語の訳文の「改築」という動詞の前に「被」を付け加えて理解することができる。「被」マークを使っていないが、中国語の意味として受身表現に属するとされる。主語から見て不愉快あるいは被害的な事柄を表すときには、適用できないタイプである。「被」を付け加えることが可能なタイプは全体の 2 割ぐらいを占めた。無視できない存在ではないかと思われる。連用修飾節に出現した受身であるが、日本語原文も中国語訳文も「家→台所→流し台、蛇口、収納棚」のような視点で述べている。

例 18 【その他】

JG 縁石は風雨に [5] さらされて 奇妙な白濁色に変色し、ところどころでひび割れて崩れおちている。

CY 石砌の井围, [6] 经过 多年风吹雨淋, 呈现出难以形容的混浊白色, 而且裂缝纵横, 一副摇摇欲坠的样子。

(日本語直訳：縁石は長年の風雨を経て、奇妙な白濁色に変色し、ところどころでひび割れて崩れおちている。)

例 18 の場合、日本語は「さらされ」で表現しているが、それと対応する中国語表現は直訳のものではないと思われる。文脈の情報に基づいて「经过多年风吹雨淋」という言葉で意識していると考えられる。小説というジャンルの特徴と訳者の表現習慣も絡んでいるが、受身表現は中国語の慣用的な表現の一部を翻訳するのに用いられる。日本語原文も中国語訳文も「縁石」の視点で述べている。

6.2 タイプ 2 (【日本語○ 中国語×】) における使用傾向

以下はタイプ 2 における使用傾向を報告する。表で示すと、表 8 である。

表 8：タイプ 2 (【日本語○ 中国語×】) における使用傾向

番号	タイプ		データ数		比例（％）
1	客観叙述		136		71.58
2	解釈		24		12.63
3	その他	「使」	2	23	12.11
		「把」	3		
		「譲」	7		
		それ以外の表現	11		
4	対応項目なし	7			3.68
計			190		100.00

日本語原文・中国語訳文のタイプ2[日本語○ 中国語×]における使用傾向は以下のよう
に整理する。使用率の多い順に、客観叙述、解釈、その他、対応項目なしになっている。
そのうち、客観叙述は7割以上を占めた。中国語原文・日本語訳文の傾向とほぼ一致してい
る。対応項目なしの例は中国語原文・日本語訳文方向のデータよりやや低い結果になってい
るが、双方向のデータのタイプ2の傾向は大体同じである。

例19【客観叙述】

JG 何日かつづいたやわらかな雨に夏のあいだのほこりをすっかり [1] 洗い流された山肌は
深く鮮かな青みをたたえ、十月の風はすすきの穂をあちこちで揺らせ、細長い雲が凍りつ
くような青い天頂にびたりとはりついていた。

CY 连日溫馨的霏霏轻雨, [2] 将夏日的尘埃冲洗无余。片片山坡叠青泻翠, 抽穗的芒草在 10
月金风的吹拂下蜿蜒起伏, 透迤的薄云仿佛冻僵似的紧贴着湛蓝的天壁。

(日本語直訳: 何日かつづいたやわらかな雨は、夏のあいだのほこりをすっかり洗い流した。
山肌は深く鮮やかな青みをたたえ、十月の風はすすきの穂をあちこちで揺らせ、細長い雲が
凍りつくような青い天頂にびたりとはりついていた。)

例19の場合、日本語のほうは受身形で表現している。それに対応する中国語の表現は主
述文という能動表現である。しかも、日本語では「洗い流された」連体修飾節に出現した受
身で、その後ろに来る「山肌」を修飾している。形容詞のような働きをしている。客観叙述
は日本語だけ受身を使用しているタイプ2全体の7割ぐらゐを占めたが、圧倒的多数とな
っている。日本語原文は「山肌→風→雲」のような視点で述べている。それに対して中国語
訳文は「雨→山肌→すすきの穂→雲」のような視点をとっている。この文において、日本語
原文は視点の一貫性が強く、中国語訳文は視点の移動性が高いようである。

例20【解釈】

JG 夕方の国旗降下も儀式としては [21] だいたい同じような様式で^{vi}とりおこなわれる。た
だし順序は朝とはまったく逆になる。旗はするすると降り、桐の箱の中に収まる。

CY 傍晚降旗, 其仪式也 [22] 大同小异, 只是顺序与早上相反, 旗一溜烟滑下, 收进桐木箱
中即可。

(日本語直訳: 夕方の国旗降下も儀式としては大同小異である。ただし順序は朝とはまった
く逆になる。旗はするすると降り、桐の箱の中に収まる。)

例20の場合、「だいたい同じような様式でとりおこなわれる」という日本語の表現は、中
国語の四字熟語である「大同小異」で翻訳している。「大同小異」を日本語に直訳すると「小
さなところは差があるが、大きな方向としては同じだ」という意味である。つまり、日本語
の表現を中国語の四字熟語で簡潔に解釈しているということである。

例21【その他】

JG 最初とはとにかくもう凄いつて思うの。たとえばものすごい難曲を楽譜の初見でパーッ
と弾いちゃう人がいるわけよ。それもけっこううまくな。見てる方は [413] 圧倒されち

やうわよね。私なんかとてもかなわないってね。

CY 一开始果真叫人拍案叫绝，例如对十分深奥的乐谱，有人只消扫一眼就能一气流注地弹奏下来，而且相当精彩，[414] 使听的人大为倾倒、自愧不如。

(日本語直訳：最初はとにかくもう凄いつて思うの。たとえばものすごい難曲を楽譜の初見でパーッと弾いちゃう人がいるわけよ。それもけっこううまくな。見てる方を感じさせちゃうわよね。私なんかとてもかなわないってね。)

例 21 の場合、日本語の原文には「圧倒されちゃう」という受身の表現が出現している。日本語原文のほうは単文末に出現した受身を使用しているが、話者あるいは見ているほうの視点で述べている。中国語訳文の視点は移動的のように見受けられる。「使……倾倒」という使役表現で対応している。ここでは「感服させられる」と訳しても意味が通じるとみなされるが、活用規則と使い方が複雑なところもあるので、使役受身を別立てて議論する必要があると考えている。他の表現も存在しているが、【その他】タイプは【日本語○中国語×】タイプ全体の 2 割ぐらいを占めた。中国語表現の多様性をも反映しているが、日本語の受身は中国のより使用範囲が広いことも示しているのではないかと考えられる。

6.3 タイプ 3 (【日本語× 中国語○】) における使用傾向

日本語原文中国語訳文のタイプ 2 における使用傾向を表 9 で示した。

表 9：タイプ 3 (【日本語× 中国語○】) における使用傾向 (日本語原文・中国語訳文方向データ)

番号	タイプ	データ数	比例 (%)
1	自動詞	9	60.00
2	能動表現	4	26.67
3	その他	2	13.33
計		15	100.00

タイプ 3 ([日本語× 中国語×]) における使用傾向に関して、使用率の多い順に自動詞、能動表現、その他となっている。能動表現の割合は、中国語原文・日本語訳文のタイプ 3 より少ないように見受けられる

例 22 【自動詞】

JG もちろん直子は知っていたのだ。僕の中で彼女に関する記憶がいつか〈1〉薄らいでいくであろうということ。

CY 直子当然知道，知道她在我心中的记忆迟早要〈2〉被冲淡。

(日本語直訳：もちろん直子は知っていたのだ。僕の中で彼女に関する記憶がいつか和らげられていくであろうということ。)

例 22 において、「薄らぐ」という自動詞が用いられている。それと対応する中国語の表現として「被」マークとなっている。自動詞タイプは全体の 6 割を占めたが、受身と同じ「なる」言語表現に属することが関わっていると考えられる。また、中国語には自動詞(“不及

物动词”)があるが、自動詞と対応しているところが多い。しかし、中国語の受身にできるのは、他動詞(“及物动词”)である観点が主流であると思われる。

例23【能動表現】

JG 土曜日の夜は永沢さんは親戚の家に泊まるという名目で毎週外泊〈21〉許可をとっているのだ。

CY 星期六晚间永泽以去亲戚家为由，每次都〈22〉被允许在外面过夜。

(日本語直訳：土曜日の夜は、永沢さんは親戚の家に泊まるという名目で毎週外泊することを許可されたのだ。)

例23の場合、日本語原文では能動表現が用いられるが、中国語訳では「被」マークタイプの受身文が使われている。作者と訳者のそれぞれの事態把握の仕方と関わっているが、「被」マークの使用によって、誤解を招くような表現を避けていると思われる。能動表現タイプは【日本語×中国語○】の3割近く占めたが、無視できない存在ではないかと考えられるが、話し手の事態把握の仕方を反映する表現でもあるが、ルールを見つけるには更なる調査と検証は必要だと考えている。

例24【その他】

JG でも俺もそうじゃないし、ワタナベもそうじゃない。〈17〉理解してもらわなかったってかまわないと思っているのさ。自分は自分で、他人は他人だって。

CY 但我不那样，渡边也不那样，而觉得不〈18〉被人理解也无关紧要。自己是自己，别人归别人。

(日本語直訳：でも俺もそうじゃないし、ワタナベもそうじゃない。理解されなくてもかまわないと思っているのさ。自分は自分で、他人は他人だって。)

例24の場合は、「てもらう」という授受表現文型は中国語の「被」マーク受身文と対応している。同じヴォイスのカテゴリーに属する授受表現と受身文は、視点の概念で大きく統合されていると考えられる。「てもらう」文型以外の表現もあるが、【その他】は【日本語×中国語○】タイプの1割強を占めた。

7. まとめ

中国語原文日本語訳文方向、日本語原文中国語訳文方向の小説の対訳データを1411対収集し、日本語の受身の出現位置の使用実態を考察した。さらに、受身の出現位置及び視点との関係に関して、分析を行った。日中・中日双方向の対訳データの分析から、以下の結論に至っている。

(1) タイプ1(「日本語○中国語○」)、タイプ2(日本語○中国語×)、タイプ3(日本語×中国語○)それぞれのデータ数の整理と分析から、日本語の受身文の使用範囲(1280個)は中国語の受動文の使用範囲より広いという結論に至っている。この分析結果は、森田(1998)、王(2009)等の先行研究を裏付けていると言えるだろう。その結果は、中国

語の受動文（“被動句”）は必ずしも「被」（“被”）「讓」「让」などのマークを用いた“被”構文（“被字句”）で日本語の受身文と対応するとは限らない、という中国語の言語事実を反映しているといえそうである。一方、中国語の受動文の表現の豊富さと多様性も表しているのではないかと考えた。中国語の能動文で日本語の受身文と対応する可能性も否定できない。

(2) 中国語の表現のほうは完全文で単独に事実を述べることが多い傾向にある。動作主あるいは変化の主体を主語の位置に立てて事柄を記述する傾向がある。こういう主語の立て方あるいは視点の立て方とは、渡邊（1995）が話し言葉を材料にして分析した受身文の非使用の原因の一つである複数の登場人物を立てて事態を把握する傾向とつながっているのではないかと考えられる。さらに、それは、水谷（1985）で指摘している「事実志向型」言語の文づくりの現れであるかもしれない。日本語のほうは文脈の情報に依存して、受身文の使用、とりわけ連用修飾節に出現した受身の使用により、視点が統一される傾向が見られた。視点の統一は、視点の一貫性にもつながっていると言える。同じ登場人物をめぐる話の場合、日本語のほうは比較的短い言葉で表現する傾向が見受けられた。その整理と考察の結果から日本語は視点一貫性が強い言語であり、中国語は視点移動性が強い言語である、という彭（2008）の指摘を裏付けている結果ではないかと考えた。

(3) 日本語の受身の出現位置に関して、使用率の多い順に、連用修飾節>連体修飾節>複文末>単文末>引用節>疑問節となっている。日本語原文中国語訳文方向の対訳データからも中国語原文日本語訳文方向の対訳データからも上述した使用傾向が窺われた。連用修飾節に出現した受身は今回の調査データの全体の4割ぐらい占め、前田（2011）での日本語の小説のシナリオを材料に行った調査結果とほぼ一致している。受身が従属節と主節の視点を一貫させる役割が連用修飾節の述語になることであることを示していると考えられる。

文脈のある環境での受身文習得の促進のために、中国人日本語学習者の日本語・中国語間の翻訳と日本人中国語学習者の受身文機能に関する理解を深めるために、どのような方策が有効か、その可能性を探ることに役に立てば幸いである。

対訳データの出典

村上春樹（2004）『ノルウェイの森』（上）講談社文庫講談社

村上春樹（2004）『ノルウェイの森』（下）講談社文庫講談社

林少華（2001）『挪威的森林』上海訳文出版社

姜戎（2004）『狼図騰』（上）中国長江文芸出版社

姜戎（2004）『狼図騰』（下）中国長江文芸出版社

唐亜明・関野喜久子（2007）『神なるオオカミ』講談社

参考文献

- 庵功雄(2012)『新しい日本語学入門：ことばのしくみを考える(第2版)』スリーエーネットワーク
- 大河内康憲(1983)「日・中語の被動表現」『日本語学』明治書院 vol.24月号 pp.31-38
- 庵功雄(2012)「文法シラバス改訂のための一試案—ボイスの場合—」『日本語／日本語教育研究』3号日本語／日本語教育研究会 pp.39-55
- 池上嘉彦・守屋三千代(2009)『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて—』ひつじ書房
- 池上嘉彦(2011)「日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての「主観的把握」」『人工知能学会誌』26巻4号 pp.317-322
- 木村英樹(1981)「『被動』と結果」『日本語と中国語の対照研究』5号日本語と中国語の対照研究会 pp.4-21
- 木村英樹(1992)「BEI 受身文の意味と構造」『中国語』6月号内山書店 pp.10-15
- 金水敏(1992)「場面と視点—受身文を中心に」『日本語学』第11巻第8号 pp.12-19
- 下地早智子(1999)「被害受身の日中比較」『中国語学』246号 pp.107-116
- 藤田昌志(2017)「村上春樹『ノルウェイの森』と林少华译《挪威的森林》：事例研究としての考察」『三重大学国際交流センター紀要』12号 pp.47-62
- 古賀悠太朗(2018)『現代日本語の視点の研究—体系化と精緻化—』ひつじ書房
- 前田直子(2011)「受動表現の指導と「拡大文型」の試み」『日本語／日本語教育研究』2号 pp.67-84
- 真嶋潤子(2015)「学習者の個人差」『日本語学 入門：第二言語習得研究』臨時増刊号 明治書院 pp.124-136
- 水谷信子(1985)『日英比較話しことばの文法』くろしお出版
- 森田良行(1998)『日本人の発想、日本語の表現—「私」の立場がことばを決める—』中央公論社
- 森田良行(2002)『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 李偉(2015)「日本語の受身文の習得に関する文献から見た研究動向」『日本語・日本文化研究』25号 pp.90-101
- 李偉(2016)「中国人日本語学習者への受身文の指導に関する一考察—中日翻訳の困難点に着目して—」『2016年バリ日本語教育国際大会予稿集』日本語教育学会
- 李偉(2017)「日本語の受身文の「結果描写」機能に関する一考察—原書と訳本の比較を通して—」『日本研究論集』15号チュラロンコーン大学・大阪大学 pp.101-119
- 李偉(2018)『第二言語としての日本語の受身文の習得研究—視点に着目して—』大阪大学言語文化研究科博士論文
- 渡邊亜子(1995)「中国語母語話者の日本語受身文の使用実態とその背景—母語との対照か

らの仮説設定一」『言語文化と日本語教育』9 号 pp.216-227

- ⁱ 「J: 陳陣が草原でオオカミの大きな群れに遭ったのはこれで二度目だ。はじめて遭遇したときの驚きがいまふたたびかれの全身を震わせる。(C: 这是陈阵在草原上第二次遇到大狼群。此刻, 第一次与狼群遭遇的惊悸又颤遍他的全身。)」のように、基本的に文法上の標識がなく、受身形も現れていないまま、動詞本来の意味から受身の意味を読み取るようなデータは語彙的受身表現として扱い、今回のカウントに入っていない。
- ⁱⁱ 中国語の表現に関する理解であるが、本論文では「被」マークを付け加えて理解することができるデータを、「被」の付け加え可能というカテゴリーを入れている。
- ⁱⁱⁱ 例文提示の便宜上、JY（日本語訳文）とCG（中国語原文）で例文をマークした。
- ^{iv} タイプ1、タイプ2のデータ番号と区別するために、〈 〉を使用してタイプ3のデータ番号を示すこととした。
- ^v 例文表示の便宜上、JG（日本語原文）とCY（中国語訳文）で例文をマークした。
- ^{vi} 下線部は、日本語の受身文に出現した動詞とそれと対応する中国語の表現である。点線を引いた部分は日本語の解釈に使われる関連の表現である。